

## 8. 藤田保健衛生大学医学部 外科・緩和医療学講座

東口 高志\* 森 直治\* 伊藤 彰博\*

(\*藤田保健衛生大学医学部 外科・緩和医療学講座)

### 藤田保健衛生大学における緩和ケア

藤田保健衛生大学（以下、本学）における緩和ケアは、外科・緩和医療学講座（以下、当講座）が中心となり、精神科、麻酔科をはじめとする他の診療科や、リハビリテーション部、栄養サポートチームなどの部門ならびに地域連携部門とも綿密に関連しながら、院内外にわたり大きく展開している。

本学における緩和ケアの歴史は古く、緩和ケアの本幹をなす緩和ケア病棟は、1987年に三重県津市の七栗サナトリウム（第3教育病院）の建設に際して、すでに設置され、1997年に大学病院としてはわが国で初めて認可を受けている。

2003年に、わが国初、また世界では23番目の緩和医療学講座として、当講座が誕生した。講座開設以来、①癒し環境の構築、②全人的医療の実践、③緩和ケアNST（栄養サポートチーム）の設立、④コミュニティの確立、⑤腫瘍学の導入の5本の柱を、さらに2012年からは、⑥自立型地域連携の創設、を加えて6本柱とした。そして、質の高い緩和医療提供を、臨床、研究、および教育の3方面で展開している。

2010年には愛知県豊明市の第1教育病院に、新たに緩和ケアセンターが開設され、緩和ケアチーム、緩和外来と一体となった緩和ケア体制を構築するとともに、全国最大規模の大学病院で、トップクラスの最新医療を展開する急性期病院の第1教育病院と、専門性の高い医療施設である七栗サナトリウムという2つの特色ある教育施設での緩和ケア教育の実践が可能となった。さらに、2012年には当講座の連携医療施設として済生会松阪総合病院に20床の緩和ケア病棟が誕生し、

一般急性期病院における緩和ケアに触れる機会が加わった。

第1教育病院と七栗サナトリウムは、すでにそれぞれ愛知豊明地域連携ネットワーク、三重中勢地域連携ネットワークという2つの地域連携ネットワークの中核病院として機能している。また、今後のわが国の根幹をなすであろう地域医療連携の構築にも重点的に取り組んでいる。

### 卒前・卒後教育と専門医教育

#### ① 卒前・卒後教育

医師の緩和ケア教育の基礎となる、医学部教育においては、現在、4年次の「緩和医療学」の9コマ（計810分）の系統講義をはじめ、1年次の「病と死の人間学」や、3年次の「腫瘍学」においても緩和ケアを扱い、5年次には第1教育病院と、七栗サナトリウムにおいて、それぞれ1週間の臨床実習を行うなど、他に類をみない緩和ケアを重視した教育カリキュラムを組んでいる。

当講座が行う医学研究科博士課程における大学院教育では、緩和医療学のみならず、代謝栄養学、腫瘍学の3分野を重要テーマとして、相互に関連する3つの分野すべてについて精通する医療人および研究者の育成を目指している。そして、緩和医療の知識やスキルはもちろんのこと、がん悪液質の解明、がんの進行と生体反応、終末期患者の代謝動態と病態生理など、代謝・栄養学を駆使した緩和医療の修得や研究を行う特徴的なカリキュラムを用意している。

#### ② 専門医教育

2008年からスタートした藤田がんプロフェッ

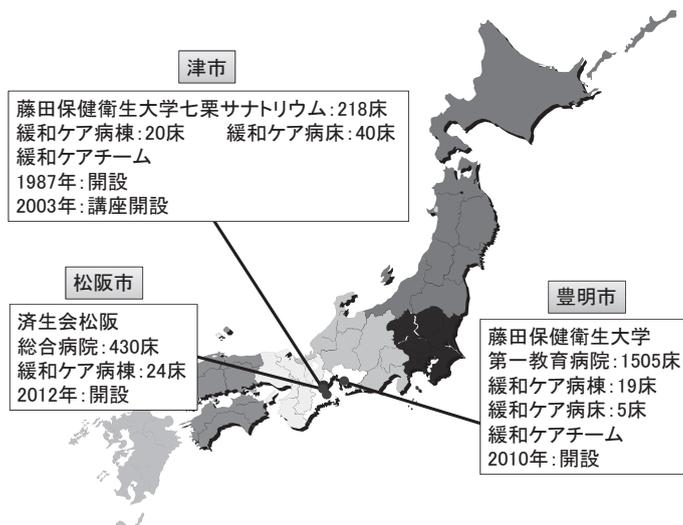


図1 藤田保健衛生大学外科・緩和医療学講座の医療体制

シヨナル養成基盤推進プラン 腫瘍専門医・緩和医療専門医養成コースは、学位を有するがん専門医の養成を目指すものであり、腫瘍に関わる臨床講座を担う人材を育てることを目標としている。①基礎腫瘍学、②腫瘍治療学、③緩和医療学（代謝栄養学を含む）、の3分野を重要テーマとして、各種セミナーによってこれらを修得し、希望に応じて、日本緩和医療学会専門医の資格要件を満たすように臨床研修を行うこととしている。

また、インテンシブコースとして地域腫瘍専門医・緩和医療専門医養成コースを設けており、各科の基本学会の認定医あるいは専門医の資格を取得している。または、それと同等以上の臨床経験を有する医師を対象として、総合診療医など一般内科の知識をもち、地域でのがん診療を担える医師、ならびにがん薬物療法専門医を取得し、臓器横断的にがんを診断・治療できる、地域でのがん診療の中心的存在となる医師を養成することを目的として、外来化学療法室、緩和ケア病棟、他科病棟における診療を通して、多職種からなるチーム医療の実際とがん症例を経験することで、緩和医療の専門医の育成するカリキュラムを組んでいる。

### ③ 緩和ケア研修会

多くの医師を抱える藤田保健衛生大学では、がん医療に携わるすべての医師に緩和ケア研修会受講を目指し、かつ研修医はその修講を義務

づけている。そのために PEACE (Palliative care Emphasis program on symptom management and Assessment for Continuous medical Education) の緩和ケア研修会を年3回行っており、大学内外の医師の研修会修了者はすでに300名を超えている。また、第1教育病院、七栗サナトリウムにおける院内の種々の緩和ケアセミナー、勉強会はもとより、愛知、三重両県で、愛知緩和医療研究会、豊明緩和医療研究会、三重緩和医療研究会、三重中勢緩和ケア研究会、七栗緩和ケアセミナーなどの緩和ケアに関係した研究会を発足させ、その中心的役割を果たしている。

### おわりに

本学、そして当講座は、わが国における緩和ケアおよび緩和ケア教育のパイオニアとして、充実した講師陣、教育カリキュラムをはじめ、ハード、ソフト両面でわが国随一の充実した教育、研修体制を構築している。しかし、年々高まる地域医療における緩和ケア医師のニーズに対して、当講座のスタッフ数や専門医を目指す人材の確保は、いまだ十分とはいえず、緩和ケアの専門医教育を充実させていくうえでの最大の課題となっている。医学生の中から緩和ケアに慣れ親しんだ世代が、多く医師となり、緩和ケアの専門医を目指してくれることに期待している。